オプション教材（きょうざい）イバラ　暗唱長文集（あんしょうちょうぶんしゅう）

●暗唱の手順　１日分

・１日目は、まず、1の文章を３０回音読します。最初の数回はゆっくり正確に「てにをは」などを間違えないように読みます。
　正確に読めるようになったら、ある程度早口で棒読みで、句読点などであまり息継ぎをせずに読んでいきます。
　イスにきちんと座って読むと読みにくい場合は、歩き回りながら読んでもかまいません。
　お母さんやお父さんは、読み方の注意などは一切せずにただ優しく褒めるだけにしてください。
　１５回ぐらいでもう空で言えるようになることが多いと思いますが、できるだけ３０回続けて読んでください。
　なぜ回数を決めて繰り返すかというと、「覚えられたらよい」という目標でやっていると、暗唱の教材が難しくなったときに、「難しいからできなくなった」ということになりがちだからです。「決まった回数を繰り返す」という目標でやっていると、難しい教材になっても同じように暗唱ができます。
　３０回音読しても暗唱できない場合は、もう１０回音読してください。
　これでその1の文章が暗唱できるようになります。
　それでもできない場合は、暗唱の自習はいったん終了してかまいません。また機会を見てやっていきましょう。

●暗唱が難しいときは

　暗唱のような短い時間の学習は、夕方にやろうとすると忘れてしまうことがあります。また、毎日同じようにやらないとできるようになりません。できるだけ、朝ご飯の前などに、家族のいる中でやるようにしましょう。
　そして、暗唱を毎日やるのが難しい場合は、暗唱の自習はせずに、読書の方に力を入れていってください。

●暗唱の手順　１週間分

・１日目に、1の文章を暗唱できるようにします。
・２日目は、2の文章だけを同じように３０回音読し、暗唱できるようにしておきます。
・３日目は、3の文章だけを同じように３０回音読し、暗唱できるようにしておきます。
・４日めは、1、2、3の全部通して、１０回音読します。すぐに暗唱できなくてもかまいません。
・５日めも同じように、1、2、3の全部通して、１０回音読します。
・６日めも同じように、1、2、3の全部通して、１０回音読します。
・７日めも同じように、1、2、3の全部通して、１０回音読します。すると、1から3の全部の文章が暗唱できるようになります。

●暗唱の手順　１か月分

・１週目に、1から3の文章を暗唱できるようにします。
・２週目は、もう1から3はやらずに、今度は4から6の文章を暗唱します。
・３週目は、同じように、7から9の文章を暗唱します。
・４週目は、1から9の文章を全部通して、毎日４回ずつ音読します。
・すると、１か月で1から9の文章が暗唱できるようになります。

●暗唱の活用

・暗唱のコツをつかむと、自分の好きな本の１部を暗唱したり、英語の教科書を暗唱したりできるようになります。また、覚えるつもりがなくても、物事が頭に入りやすくなります。

●より詳しい説明は

　より詳しい暗唱の仕方は、「暗唱の手引」（http://www.mori7.net/mori/mori/annsyou.html）をごらんください。

暗唱長文 小１ 7月　　踏み外した階段

1 キンコーンカンコーン、キンコーンカーンコーン。
チャイムがなるのと同時に、ぼくは教室のドアを飛び出しました。
今日の中休みは、校庭で鬼ごっこをすることにしていました。少しでも長い時間遊びたかったので、一番乗りで校庭にかけつけるつもりでした。

2 ぼくの教室は三階です。ドアを飛び出し右へ曲がり、階段まで全速力で走ります。階段の前で急ブレーキをかけると、キキキキーと上履きが廊下にこすれる音がしました。まるで自分が車になったような気分です。

3 ここまではぼくが一番です。うしろに、ヒロトとフミヤが続きます。これは負けていられないぞ。ぼくは、心の中で思いました。
ぼくは、階段を二段抜かしで降りることにしました。二階までは順調に飛ばしました。4 ところが、二階から一階へ降りる途中で、階段を踏み外してしまいました。一瞬、何が起きたのかわからないまま、ぼくは踊り場まで転がりました。
「いてえ。」
ぼくは腰を押さえながら起き上がりました。5 ヒロトとフミヤは心配そうにぼくの顔をのぞき込みながら、
「大丈夫？　血が出てるよ。」
と言います。ずきずき痛い足をふと見てみると膝から血が出ていました。
「あーあ、これじゃ、保健室行きだな。ちょっと行ってくるよ。」
6 ぼくはそう言って、一階にある保健室に向かいました。ぼく一人で行こうと思ったのに、ヒロトとフミヤもついてきました。
「あら、どうしたの？　怪我？」
保健室の田上先生は、ぼくとすっかり仲良しです。7 どうしてかというと、ぼくはしょっちゅう怪我をして保健室に行くからです。

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

「階段でこけちゃった。」
ぼくは恥ずかしそうに言いました。
「気をつけないと、ほんとうに危ないのよ。階段は走らないこと。顔を怪我しなくてよかったね。8 かっこいい顔が台無しになっちゃうわよ。」
と、先生は優しく注意しました。怪我を消毒するときは、とてもしみて、悲鳴をあげそうになりました。でも、格好が悪いので我慢しました。9 怪我をしたのはぼくなのに、ヒロトとフミヤも、なんだか痛そうな顔になっていました。
「ごめんな。遊べなくなっちゃったな。」
と言うと、二人とも、
「いいよ。また、明日やろう。」
と言ってくれました。明日は転ばないように、もう一度階段をかけおりるぞとぼくは思いました。0

（言葉の森長文作成委員会　㋮）

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

暗唱長文 小１ 8月　　初めて打った太鼓

1 明日は、神社のお祭りがあります。天王様と呼ばれているお祭りです。おじいちゃんが子どものころからずっと続いているお祭りだそうです。毎年、子どもたちは、水色の法被を着て神社に集まります。

2 私も友だちも、天王様をとても楽しみにしています。

神社からは、お囃子の笛の音が聞こえてきました。明日の練習をしているのです。太鼓の音もドンドンとおなかの底に響きます。**3** お兄ちゃんが、

「ちょっと見てこよう。」

と言うので、私もついていくことにしました。

「太鼓、たたいてみるか。ほれ。」

そう声をかけられて振り向くと、お父さんの友だちの中村さんがいました。**4** お兄ちゃんは、

「え、やっていいの？　やらせて、やらせて。」

と、大喜びでバチを貸してもらいました。

「ドン、ドン、ドン」

お兄ちゃんは三回、大きく打ちました。中村さんは、

「もっと思い切ってたたかないと、いい音は出ないぞ。それ、もう一回。」

と言いました。**5** お兄ちゃんはもう一度、腕を大きく上げて打ちました。

「ドーン、ドーン」

今度はおなかに響く音です。ほかのおじさんも、

「うまいなあ。明日、たたいてみるか。」

と笑っています。褒められたお兄ちゃんは、ちょっぴり得意そうです。

6 しばらく打って満足したのか、

「お前もやる？」

と、私にバチを手渡してくれました。お兄ちゃんみたいに上手にできるかなあと心配でしたが、私も思い切り打ってみました。

「ドーン。」

自分でもびっくりするくらいいい音がでました。

7 「おお、こりゃすごいぞ。」

おじさんたちが拍手してくれました。

「笛、吹いてみるから、ちょっと合わせてみろ。」

そう言って、赤い顔のおじさんが笛を口に当てました。お囃子のメロディーは小さなころから聞いているので、どこで太鼓を打つかも知っています。

8 「ピーピピーピピーピ」

「ドンドン」

私は、思い切り打ちました。メロディーに合わせて、

「ドドン、ドドン、ドンドン」

と続けます。

「うわあ、楽しい。」

いつのまにかとてもいい気分でたたいていました。**9** いつまでもたたいていたい気分でした。

お母さんは、よく私のことを恥ずかしがりやだと言います。私もそうだと思っていました。でも、恥ずかしがりやの私はどこかへ行ってしまったみたいでした。**0**

（言葉の森長文作成委員会　©）

暗唱長文 小１ 9月　　ママの床屋さん

1 今日は、お母さんに髪を切ってもらう日です。ぼくたち兄弟は、お母さんに髪を切ってもらうことを、ママ床屋と呼んでいます。いつもママ床屋なので、ぼくは一度も床屋さんへ行ったことがありません。

2 「準備できたよ。ひとりずつおいで。」

お風呂場からお母さんの声が響きます。ママ床屋は、お風呂場でお店を開くのです。夏は暑いので裸でちょうどいいけれど、冬のママ床屋はぶるぶる震えてしまいます。

3 ぼくは急いで服を脱ぎ、お風呂場へ飛んでいきました。お母さんは右手にバリカンを持ち、ぼくを見るとにっこりしました。

「さあ、切ろうか。下を向かないで、ちゃんと前を見ててね。」

4 そう言いながら、バリカンのスイッチを入れました。ウイーンウイーンと、バリカンの音が耳の近くで聞こえます。ときどき髪の毛が引っ張られるので、ぼくは、

「いてっ。」

と、まるでカメのように首をすくめます。5 お母さんは、

「だめだめ。まっすぐにしていないと、変なところを切っちゃうよ。」

と言います。バリカンに刈られた髪の毛が、パサリパサリとぼくの肩や背中にくっつきます。そのうち、ちくちくと刺してきます。6 体中かゆくてたまりません。

「ああ、もう限界だあ。」

と、ぼくが我慢できなくなるころ、後ろの髪のカットが終わるのです。

「できた、できた。じゃあ、今度は前髪。さ、こっち向いて。」

ぼくは、くるりと振り向きました。7 目をつぶり、動かないように息を止めます。

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

「はい、終わり。頑張ったね。」

ぼくは目を開けました。お母さんは、少し離れてぼくを眺めています。ぼくが動いたから変なところを切ってしまったのではないかと心配になります。

8 「うん。いいんじゃない。床屋さんじゃないのに、なかなかうまいよね。」

と、お母さんが言いました。ぼくはほっとしました。

シャワーで洗い流すと、ちくちくしたのが取れてすっきりしました。9 くもった鏡をごしごしと手で拭いて、ぼくの顔を映してみました。いつもと違うぼくの顔です。自分でもなかなか格好いいなと思いました。0

（言葉の森長文作成委員会　㊐）

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34